
真剣で私に恋しなさい！！～名もなき武道家の物語～

妹子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で私に恋しなさい！！～名もなき武道家の物語～

【Nコード】

N8118T

【作者名】

妹子

【あらすじ】

眼鏡をかけた地味な少年が、最強と謳われている川神百代を倒そうと頑張っていくお話。

この小説は、『真剣で私に恋しなさい！！～地味な眼鏡はただ歩く～』を改稿した作品です。内容は、ほとんど変わらないのですが、違うところが少々あると思います。

川神百代は目を閉じて腕を組み、川神院の門の前で佇んでいた。

百代は、彼女と闘う約束をしていた人物を待っていた。また、その人物と初めて会い、闘った日のことを思い浮べていた。

去年の秋の朝、いつもどおり幼なじみたちと雑談を交えてながら通学路である河原を歩いているとき、ある異常が発生した。川神学園の白を主としたジャージを着ている男子が、百代に決闘を申し込んできたのだ。眼鏡をかけた、それ以外特徴らしい特徴がない地味な男子だった。初めて見る顔だった。

隣にいた幼なじみの一人であり弟分でもある直江大和に、百代はあの男子が一体何者なのか聞いてみた。大和は交友関係が広く、もしかしたら眼鏡をかけた地味な彼のことを知っているのではないかとそう思っただけ聞いてみたのだ。案の定大和は知っており、彼の情報を教えてくれた。

名前は葛西清晴といって、大和とはクラスメートらしい。見た目どおりクラスの中でも地味で影が薄く、目立った行動をした姿を見たことがないと言っていた。

百代はふーんと軽く相槌を打った。

（そのわりには、私に決闘を申し込むという目立つ行動をとったかなぜだろうか）

百代はうーんと唸り、頭を悩ませた。

少しの間、葛西を舐めるよう見ながら、あまり使わない頭を働かせる。すると、ある答えに導くことができた。どうやら葛西は何かしらの武術を習っているらしい。葛西の未熟なりに鍛え上げられた肉体を見てそう思った。

おそらく、川神院の後継ぎであり武道家の中で最も強いとされている百代を相手にし、勝って最強の座を奪おうとしているのだろう。それとも、自分の実力が彼女にどれくらい通用するのか、そんな好奇心によって腕試しに来たのかもしれない。

「……わかった。なら、今ここで戦おう」

断るという手もあったが、それでは申し込んできた相手に失礼なので、百代は、それをしぶしぶ聞き入れたのだった。

すると、周りから喚声が響いてきた。いつの間にか観衆ができていたのだ。その大半が川神学園の生徒だった。

「すまないが、観客は遠ざけてくれないか。これから行うのは真剣な勝負だからな」

百代が幼なじみたちに向けて言った。幼なじみたちは頷き、言われたことを手際よく実行し、あっという間に観衆をどこかへ移動させた。

「よし。じゃあ始めるか」

百代は言い、葛西がそれに応える。そして、互いに戦闘体勢に入った。

百代は平然と立っている。けれど、そこには一切隙がなく、鬨気で葛西を威圧していた。一方葛西はそれに怯むことなく、足を肩幅まで開き腰を少し落として、左拳を前に出し右手を腰のところに置いていた。空手に似た構えだった。

「準備ができたな。本気で行くぞ！」

言った刹那、百代は地面を強く蹴り上げて、葛西のもとへ移動し、彼の顔に向けて右正拳突きを放った。単純な攻撃だ。けれど、葛西は気付いていないのか、動く様子を見せず構えたままでいる。そして、あっさりと百代の右拳が葛西の顔にめり込んでいき、一気にそれを振り抜いた。

一回転二回転三回転。

葛西の身体が強風に煽られた風車のように高速に円を描き、草花が生える地面へと叩きつけられた。レンズが割れた歪んだ眼鏡も落ちてきた。

それから葛西は、立ち上がることはなかった。勝負が決したのだ。

百代は一礼をする。そして、携帯電話を取り出して川神院に電話をかけた。川神院の門下生に葛西を回収させて、怪我を負っていないか確かめさせるのだ（後から聞いた話なのだが、やはり葛西は怪我を負っていたようだった。鼻の骨が折れていたらしい。百代の拳をまともに受けたことが原因だろう）。

携帯電話をしまい、一息吐き、百代は幼なじみが出迎えてくれているほうへ足を伸ばしていった。

大和が「やっぱりというか何というか。今回も姉さんの余裕勝ちだったね」と言ってきたので、百代は「ああ……」と気のない返事をした。そしてまた、雑談をしながら登校していくのだった。

これがこれから闘う相手である葛西清晴と初めてした決闘だった。百代にとって満足できない闘いだったし、葛西もまた不満が残るものだったようだ。

だから、葛西は負けて以来、何度も百代に決闘を申し込むようになったのだろう。見た目によらず負けず嫌いのようだ。

百代は、内心では面倒臭いと思いつつもそれに応え、幾度となく返り討ちにしてやった。けれど、それでも葛西は諦めることなく挑み続けてきた。

葛西の実力は闘うごとに上がっていき、百代の攻撃をたまにだが防げるまでになった。

まだまだ百代には遠く及ばないけれど、葛西と闘うことが彼女にとって楽しみになっていた。

——そして今日も闘う日だった。午後三時に川神院で決闘をしようとして、葛西から持ちかけてきたのだ。勿論、百代は承諾した。けれど、持ちかけてきた彼はまだ来ておらず、約束の時間から二十分は過ぎていた。

待つ身である百代は、早く来いと言わんばかりに、指で腕をトンと一定のテンポを保ちながら叩いていた。

次第に苛立ちが募ってくる。

それが頂点に達しかけたとき、ある気配がここに――川神院に近づいてきているのを感じた。葛西である。

気配のするほうに顔を向けた百代は、毒気のある笑みを浮かべた。

「ふふふふ。私を待たせたことを後悔するんだな。今日はいつもより厳しく、激しく、容赦なく闘ってやるぞ」

「凄まじい顔だわ」

と川神が、右手に持っているハンドグリップでトレーニングしながら言った。彼女の特徴のひとつであるポニーテールが、力を入れるたびに微かに揺れる。

僕は川神学園の二年F組に所属しており、その教室には、友達と談笑している生徒や、登校してすぐに自分の席に座って読書をしている生徒、そして、机に伏している生徒がいた。まだ来ていない生徒もあり、空いている席が断片的にあった。

「……お前の姉ちゃんがそうさせたんだぞ」

ガーゼが貼られている右の頬をさすりながら僕は言った。そして、鋭い痛みが走った。静電気のようなピリツとした痛みだった。

昨日の先輩との試合は僕の敗北、先輩の勝利という、誰もが予想したであろう結果で終わった。僕は一度も攻めに入ることができず、先輩に問答無用で殴られてばかりいた。だからなのか、顔だけでなく、両腕や両足——胴体という、ほぼ全身がズキズキと悲鳴を上げていた。

川神は僕の顔を見て「むふふ」と笑った。

僕はその笑いが気に食わず、むっとした。

僕と向かい合っているポニーテールの少女は川神一子と言って、

苗字でわかるとおり、僕と因縁がある先輩——川神百代の妹だった。常に辺りに元気を振りまいていて、前向きで陽気な性格をしており、犬のように従順で純粋な心を持っているからなのか、川神は老若男女問わず親しまれていた。また、風間ファミリーという変わり者仲良し集団のメンバーだった。

川神学園に入学してから数カ月が経ち、季節が秋になってから川神と知り合った。無謀にも先輩に決闘を申し込み、圧倒的な力の前にねじ伏せられたあの日から十数日後、折れた鼻の調子がよくなり、そろそろ登校してもいい頃だろうと思つて久しぶりに学園に行った日に、川神を含む風間ファミリーメンバーを引きつれたそのリーダーに話しかけられたのだ。彼らは、学園では有名で、人間関係が乏しい僕ですら知っているほどで、まさか声をかけられるとは思つておらず、驚いてしまった。

どうやら、ケガの心配をしてくれたらしい。だから、先輩の正拳突きによつて折れた僕の鼻の容態を訊ねにきたのだ。そして、もう一つ理由があつて話しかけてきたようだった。

これが川神とのファーストコンタクトだった。

「流石はお姉さまね。キヨの地味な顔を、こつも派手にできるんだもん」

川神は尊敬する姉を褒めると同時に、僕の顔をバカにしてきた。イラッときた。

「地味って言うな。それにふざけるな。こんな顔にされた僕は、非常に迷惑しているんだぞ」

僕は少し声を荒くして言った。

「よかったじゃない。だって、誰もが注目する顔になれたんだから」
「よくねえよ。道行く先々で出会う人の視線が、必ずと言っていいほどこれに向けられるんだぞ。はずいっつつつの」

僕はリンゴのように赤くなっている顔に指をさし、ぐちぐちと言った。

実は、昨日の決闘直後の僕の顔のほうが、今より腫れていた。風船のように膨れていただろう。けれど、川神院に住んでいる門下生の丁寧な介抱のおかげで、幾分腫れが治まった。痛みが引いた。

僕は、そうしてくれた門下生に感謝していた。

「まあ、でも、そうなくてもキヨはめげることなく、お姉さまに挑み続けるんですよ」

川神がそう訊ねてくる。

「……そう、だな」

僕は曖昧に返した。

本当のところ、続けられる自信はなかった。先輩と初めて闘った以前の僕は目標を見つけることができず、見つけられたとしてもすぐに無理だと諦める中途半端でふぬけた生き方をしていて、そんな奴がやっていけるとは思えなかったからだ。

今は目標があるものの、またすぐに諦めてしまつのではないか――
――そんな不安を感じていた。

「根性あるわよね、キヨつて。地味なくせに」

川神は言った。キイキイと、ハンドグリップが閉じたり開いたりしている音が聞こえてくる。

「地味は余計だけど、何？ 根性？」

僕はその言葉を反芻させた。

どうもそれは、僕にはふさわしくない、そう言われる条件をまだ満たしていないように思え、納得がいかなかった。

「そう、根性」

「ないよ。僕には」

僕は苦笑した。

「いいえ、あるわ」断言する川神。「だって、キヨは何度もお姉さまと闘っているのよ」

「いやいや。僕以外でもそういう人はいるだろ」

事実、先輩が武道家に決闘を持ちかけられている場面をたびたび目にする。つまり、僕の他にも先輩を倒そうと考えてる者がいるということだ。

「いるにはいるわ。けど、ほとんどは、お姉さまと一回闘って終わりよ。お姉さまの強さに慣れて逃げちゃうわ。キヨみたいに繰り返し闘う武道家なんて数少ないものなのよ」

川神が言う。

先輩を間近で見ている川神が言っているのだから、そのとおりなのかもしれない。しつこく先輩に決闘を申し込んでいる僕が言うのもなんだけれど、確かに最強と謳われている先輩と繰り返し闘おうなんて命知らずなことだと思うし、たとえ命がいくらあっても足りないだろうし。

ならやはり、僕はかなりの根性の持ち主なのだろうか。

(うーん……)

そうだったとしても、考えれば考えるほど、あまりに僕に縁のない言葉だと思った。

「まあ、でも、その根性は、未熟な部分もあるようだけどね」

と川神が言った。

僕はその意味がわからず、眉をひそめた。

「だってそうでしょ。お姉さまを相手に何度も闘えるキヨは素直にすごいと思うわ。けど、せっかくお姉さまが大切な時間を削って、キヨの申し出に応じてくれたというのに、当の本人は寝坊して、遅刻してくるだもん。真の根性を持つ者は、そんなことしないわ」

それを聞いた僕は、ぬつと、言葉を詰まらせた。言い返すことができなかった。

僕は昨日寝坊してしまった。遅刻する気はおよそなかったのだが、寝坊したことによって、約束の時間を大いに破ってしまった。

先輩と闘う日の前日は――その晩は必ずと言っていいほどに緊張してまい、寝付けない。どうすれば先輩に勝てるのか、先輩にどのくらい追いつけたのか、そんなことを考えていくうちにプレッシャーを感じてしまい、いくら目を瞑っていても眠くなる様子が一向に訪れないのだ。

だから、修行をする。そうすると、翌日のことを忘れることができ、神経がそちらに向けられ気持ちを落ち着かせられるのだ。けれど、熱中しすぎて夜遅くまでやっていることがあり、その日もそうだった。

僕はこんな遅くまで修行をしていたことに後悔しながら、身体を動かしたことによって出た水分をシャワーで流し、無地のシャツとハーフパンツを身に着けて、自分の部屋にあるベッドの上に横になった。身体を動かしたことで気持ちはスッキリしていたので、ゆっくりと眠ることができた。

そして、眠りから覚め、目を開けて部屋にある時計を見てみれば、その針は午後の三時近くをさしていた。いつもなら正午までには起きるはずなのだが、修行の疲れによるものなのか、今回は深く寝入ってしまったようだった。寝過ごした。

僕は当然慌てた。遅れて行けば、先輩に何をされるのかなんて明白なことだったからだ。

ベッドから飛び降り、急いでジャージに着替えて、顔を洗い、歯を磨き、眼鏡をかけて、遅い朝食——ではなく、遅い昼食をとった。

そして、僕は家を出て、愛用している自転車にまたがり、先輩が待つ川神院へと向かうのだった。足に疲労を感じても緩めることなく、全力でペダルをこいで、川神院に急行した。

けれど、その努力は空しく、結局間に合わなかった。そして、待つことに疲れ、不機嫌にもなっていた先輩によって、この有様だった。

自業自得である。

「……まあ、いいじゃん。もう過去のことなんだしさ、気にすることないって。先輩だって、そのことを許してくれたし」

僕は眼鏡をクイツと上げ、誤魔化すように言った。

決闘を終え、僕はすぐに、ぼろぼろの顔のまま先輩に謝った。遅れて来てしまったことに悪いと思ったからだ。すると先輩は、あっさりと許してくれた。僕を散々殴ったことにより、気分がすっきりしたから許したのだろう。——というか、先輩の口からそう言っていた。

「そんなこと言っているの？　もし、また遅れて来たら今みたいにいえ、昨日みたいに、いえ、昨日よりもっと酷いものになるかもしれないのよ。キヨの顔の原型は留めていないかも」

川神は空いている手の人差し指を僕に向けてきた。

今よりも、昨日よりも酷く――

妖怪とかゾンビとか、そんな得体もしれないぐちゃぐちゃな顔にさせられるのだろうか。してしまふのだろうか。

――先輩ならやりかねない。

「……わかった、これからは遅刻しないように心がけるよ」

僕は力強く、そう誓った。

その時、ホームルームの開始を知らせる鐘が、教室に響き渡った。

騒がしかった教室は沈黙に支配され、クラスメートはマネキンのようになっていた。

「小島先生が来ますよー」

小学生のような小柄な女子がそう言うと、再び教室内が騒がしくなり、クラスメートたちは急いで自分の席に座り始めた。

小島先生とは、二年F組の担任で歴史を担当しており、弓道部の顧問でもあった。とても指導が厳しく、体罰を当たり前に実行する教師だ。

このまま騒いでいると、小島先生に体罰を受けることになってしまったため、そうならないように椅子に座り、姿勢を正し、静かに待つのだった。

「早いなあ、もうそんな時間なんだ」

川神が残念そうに言葉を漏らした。

僕と川神はとくに自分の席に座っていたので、慌てることはなく、余裕でいられた。

僕の席の後ろが川神の席だった。

「それ、しまえよ。先生に叱られるぞ」

僕は、川神が持っているハンドグリップを指で示した。

「おお、そうね。話すのに夢中だったんで、すっかりこれの存在を忘れていたわ」

川神は言って、鞆にハンドグリップをしまった。

僕はそれを見て苦笑いを浮かべた。トレーニング用品を鞆に入れている女子というのが、あまりに斬新だったのだ。猛々しい。

——コツコツコツ。

廊下から足音が聞こえてきた。ハイヒールで床を叩くことで鳴る音だった。小島先生が教室の目前まで来ているようだ。

「じゃ、また」

僕は川神に軽く手を上げて、前を向いた。

「朝のホールルームを始める」

扉が開き、そこから現れた鞭を握りしめ、黒のスーツを着た女性が教壇に立ち、高らかに言った。

彼女が小島先生——小島梅子である。

「起立！ 礼！」

先ほど呼びかけた女子が号令して、僕を含めた生徒全員が立ち上がり、元気な挨拶をした。

「おはよう！ 着席してよし」

先生に許可を出され、立った生徒は一斉に座った。

こうして、いつもどおりの一日が始まるのだった。

僕はストラップの紐を指先でつまんで宙にぶら下げ、それを眺めていた。

ストラップは馬の形をしており、虹のように色鮮やかなものだった。僕にとって普段見かけない代物だったので、そのストラップは奇妙に思えた。

これは僕のではない。ここ——川神学園の階段で拾った、いわゆる落とし物だった。

誰が落としたのかは見当がついている。川神学園の生徒の女子だ。名前はわからないが、彼女の特徴は憶えている。

どうして知っているのかというと、僕は、彼女がこの馬のストラップを落とす瞬間に居合わせていたからだ。

川神とちよつとした根性論を語った日の放課後のこと。家に帰るために自らが所属する教室から出て、廊下を渡り、階段を下りていくときだった。前髪を切りそろえ、後ろ髪を二本に結った、大和撫子という言葉が似合う女子が階段を駆け上がりながら僕のほうに慕進してきたのである。中身が入っている刀袋を抱えており、その時は、ストラップも身につけていた。

彼女は慌てていた様子だった。そのため、僕のことなど気づかなかったのだろう。

（このままではぶつかる）

そう思った僕は、避けるために身体を横に移動させようとした。しかし、僕の先輩である川神百代によって痛めつけられたそれは深刻なダメージを負っており、そのために咄嗟の行動を取ることができなかった。電撃のような痛みが全身を駆けめぐり、そのあまり、避けるという働きを止めてしまったのである。

そんな僕とは裏腹に、彼女はすごい勢いで僕に向かってくる。

（――ああ）

僕と彼女との二人の間の距離が狭まったことにより避けることはもう無理だろうと悟った僕は、どんな衝撃にも耐えられるように身構えた。しかし、僕の身体はボロボロで頼りないものであり、ぶつかれば確実に怪我は悪化し、完治に至るまでの期間が延長されることは明らかだった。

――が、僕は身構える必要がなかったことを知る。

接触するまであと数センチというところで彼女は僕の存在を感じし、避けたのだ。坂を下るブレーキの壊れた暴走自転車のような速度を保ちながらもタツプダンスのような高速のステップを踏み、川の流れのような滑らかな動きで僕の横を通り抜けたのである。無駄がない綺麗な所作だった。

一筋の汗がつーっと、腫れあがった頬を伝う。いきなり一人の人間が突っ込んできて、その勢いのまま僕の横をすれすれで通ったことにビビったのである。

気持ちいを落ち着かせるために深呼吸をする。何回か繰り返すと、

高鳴っていた心臓の鼓動は、静かになっていった。

彼女を確認するために振り返る。しかし、彼女の姿はなかった。

上から足音が聞こえてくる。彼女は僕の横を通り抜けたあと、そのまま階段を昇っていったらしい。

代わりに、先ほどまで彼女が身につけていた馬の形をしたストラップがあつた。踊り場にころりと落ちていたのである。避ける際に起こった何かしらの作用で落ちたのであろう。

耳に神経を集中させ、彼女の足音を聞き取ろうとする。足音は段々と遠ざかっていき、最終的には聞こえなくなった。取りに戻ってくる気配はない。ストラップを落としたことに、彼女は気づかなかったようだ。

僕は踊り場まで戻り、ストラップを拾った。どうしてそうしたのは僕自身わからない。落し物であるストラップなど他の誰かに拾わせて、そのあとのことを委ねさせればよかったのだけれど、そう目論む前にストラップに吸い寄せられるようにして拾ってしまったのだ。

拾いはした。しかし、僕は彼女を追わなかった。拾ったものだから、ストラップを届けなければいけないという使命感が生まれたけれど、それを果たすには彼女に声をかけなければいけないという事実があり、そうすることに抵抗があつた。僕は人見知るところがあり、初対面の人や初対面でなくても——普段あまり会話しない人に話しかけることを苦手としていたのだ。

僕は悩んだ。やはり彼女を追ってストラップを届けに行こうか、

それとも届けることなく、このまま家へと帰ろうか。

僕だけしかない階段で、どちらにしようか考える。

（――よし）

少しの時間が経過して、僕は答えを決めた。

（帰ろう）

悩んだ末、僕はストラップを届けることをせず、家に帰ることをした。後日、もしかしたら彼女を見かけるかもしれないから、その際に渡そうと結論付けたのだ。

ゆっくりと階段を下りていきながら、手に持ったストラップを見た。馬の形をしており、虹のように色鮮やかである。紐は床に向かってゆらゆらと左右に揺れている。

僕は釈然とした。今すぐに彼女の後を追ってストラップを届けに行ったほうがいいのではないか、そう思ったのである。

しかし僕は大丈夫だろう、明日か明後日、もしくはその後に届ける機会があるだろうと自分に言い聞かせて、学校を出たのだった。

まあ、案の定と言うべきか。家に帰ってから渡せばよかったと後悔することになる。

結局、あれから今に至るまで彼女とは一度も会うことはなかったのだ。同じ学園に通っているというのにこれは一体どういうことなのか不思議に思った。運命のいたずらというやつなのか。そうであ

るのならふざけるなと怒鳴りたいところだった。しかし、再び会うことになっても届けることをしないかもしれない。

「——あつ、それ」

ストラップを眺め続けていると、横から声が聞こえてた。そこに目を向けてみるとひとりの男子生徒がいた。直江大和だった。

直江は僕のクラスメートであり、風間ファミリーの一人だった。変り種が多いこのF組の中では成績がよく、軍師と呼ばれ、時には様々な策を巡らせる男である。僕とは違い交友関係も広く、人話しかけられる光景をよく見かける。また、先輩とは姉貴分と弟分という関係で、おそらく先輩にとって一番仲のいい男子は彼だろう。

「な、直江君」

僕はおそろおそろ言った。風間ファミリーとは顔見知りで会話を交えることがあるけれど、そのほとんどが川神姉妹で、ほかのメンバーとはあまりない。だから、直江とは距離を測りながらでしか話すことができなかった。

「……このストラップ、見たことがあるの？」

僕は訊く。

「ああ、これ俺と同じ寮に住んでいる子のだろ」

直江は言った。

彼の言う寮とは、川神学園に通う生徒が暮らす寮がいくつかあり、

その一つである島津寮のことを言っているのだ。風間ファミリーのメンバーの一人の母がその寮母をやっており、直江大和が暮らしている場所でもある。そして、先日遭遇した彼女もそこで生活しているようだった。

彼女を知っていて、さらにひとつ屋根の下で住んでいる人物がまさか風間ファミリーであることに僕は驚いた。

「どうして葛西が、持ってたの？」

「えっと、それは――」

僕はストラップを拾った日の、その時の経緯を説明した。

「ああ、なるほど」

直江は大して興味をしめさず、頷いた。

「俺が届けようか？」

直江はそう言ってきた。

「え？」

「いや、そのほうが葛西にとっていいだろ。人見知りする葛西からすれば荷が重いからな。俺ってほら、葛西と違って人見知りしないし、葛西の言う彼女とは同じ寮に住んでるから簡単に届けられるからさ」

たしかに直江の提案は願ってもないものだった。喜ぶべきことだ

ろう。けれど僕は、自分の短所である人見知りをしたから届けることができなかったなんて説明してない。『彼女が落としたストラップを拾い、すぐさま彼女に届けようとしたが、その姿を見失って届けることができなかった』と嘘で塗りつぶした言葉を吐いたのだ。直江に対してまだ心を開きつていない僕が本当のことを話すはずなかった。

それなのに直江は僕の嘘を見抜き、凶星を突いてきた。彼は、小さな拳動を見ただけでその相手がどのような心理状態なのかを把握できるほどの洞察力を持ち合わせているのだ。

僕は直江大和のそういうところを苦手としていた。知られたくない個人情報を知られているような、そんなぞわぞわとした不快な感覚を抱かせるからだった。

「えっ……いい、いいよ。直江君に悪いし、自分でできるからさ……」

僕は言う。遠慮してではない。素直に悪いと思ったし、何より、僕自身が拾ったものなのだから僕自身で届けたいという気持ちもあるのだ。

「気にするなつて。ほら」

直江がストラップを渡すように促してくる。

僕は迷った。届けたいとは思っている。けれど、そうすることにまだ抵抗があり、難しかった。ならば、直江に任せたほうがいいのではないかと、考えさせられた。

「……………」

僕は直江にストラップを譲った。彼に任せることにしたのだ。そのほうが彼女の手元にストラップが早く戻るだろうから。

「じゃ、届けるから」

直江はそう言って、教室の隅に集まっているクラスメートのほうに足を運んだ。僕は一人、自分の席に座っている。

ため息をつき、自己嫌悪に陥った。やろうと決めたことを中途半端に断念し、他人に投げ渡したことに情けなさを感じたからだった。

「あー……」

力なく声を漏らした僕は、気を紛らわすためにきよきよと教室を見渡した。すると、席に座り両手に本を持った女子と目が合った。少しつりあがった目を鋭くして僕を睨んでいる。

僕はすぐさま視線をそらし、黒板があるほうを向いた。

まさか、かの女子は僕と直江とのやり取りを傍観していたのだろうか。だとしたらみつともない姿をさらしてしまったかもしれない。そう考えると羞恥に襲われた。

「あー……」

僕はまた声を漏らし、机に伏した。視界が暗闇に覆われる。

「……しょーもない」

かの女子の声が聞こえた。ぼそつとした、聞き逃してしまいそう
な小さなものだった。何に対してしょーもないと思ったのかはわか
らないが、僕は、彼女の声のなかに批判的な感情が含まれているよ
うに感じた。

（まあ、そうだよな……）

かの女子の性格を考えれば、仕方がないことだろう。

——突如、勢いよく扉が開く音が聞こえた。僕は顔を上げる。そ
の前には担任である小島梅子が立っていた。まだホームルーム開始
のチャイムがないっていいはずなのだが、どういことなのだろ
うか。

クラスメートたちはいきなりのことですりすましているけれど、
すぐさま自分の席に座っていった。

全員が座つたのを確認した小島先生は教室に入り、扉を閉めて、
教壇へと上がっていった。いつものように鞭がその手に持たれてい
た。

小島先生がいるだけで自然と身が引き締まる。

「さあ今日は、お待ちかねの転入生が来る日だ」

小島先生が口元を微かに上げて、言う。

（ああ、そつえば——）

そつえば今日は、この教室に転入生が来る日だった。前の日の

ホームルームで小島先生が告知していたのだけれど、落し物のことばかりに思考を寄せていたからすっかり忘れていた。

小島先生がいつもより早く来たのは、多分、転入生を紹介する時間の確保のためだろう。

転校生はたしか、リユーベックとかいうドイツの都市を出身にしているらしい。性別はまだわかっていない。

さつきまで落ち込んでいた僕であつたが、転入生が来るということとでテンションが上がる。しかし、依然としてストラップを自分の手で届けられなかったことに心残りがあつた。

「では、入りたまえ」

小島先生が言う。僕は興味が宿る視線を扉へと送る。

ガラガラツと扉が開き、とうとう転入生とのご対面をすることができた。

教室全体がざわざわと騒がしくなる。転入生がイケメンだったとか美人だったとか、そういう歓喜な騒がしさではなく、むしろその反対で、あつてはならないはずの異物が侵入してきたために起こった拒絶反応的な騒がしさだった。僕も絶句してしまい、何度もメガネに手をやった。落し物のことなんてどうでもよくなってしまいそうだった。

だって、そうだろう。転入生らしき人物は顔に複数のしわを作っており、その髪もすでに脱色している——中年男性のような容姿をしていたのだから。

そんな慌ただしい状況を男性は受け流し、一言口にするのだった。

「グーテンモルゲン」

教壇に立ち、黒板にクリスティアーネ・フリードリヒと書いて、

「クリスティアーネだ。よろしく！」

と、太陽のように輝かしい金髪を腰まで伸ばした美少女が意気揚々に言った。その瞳は凜としており、その肌は白ウサギのように白く触り心地がよさそうだった。

噂の転入生の性別は女だった。元気があり見た目もいいということで、僕にとってクリスティアーネの第一印象は良好だった。クラスメートの男子も歓喜している。

クリスティアーネの横には、先ほど僕らを驚かせた中年男性がいた。クリスティアーネと同様に肌が白く、軍帽と軍服を身に纏っている。男性はクリスティアーネを見て、厳つい目元を緩めて微笑ましそうにしていた。

男性はクリスティアーネの父親らしい。娘の華々しい姿を見に来たのだろう。しかし、転入してくる娘よりも先にこの二年F組の教室に入ってくるのはどうかしていると思う。先に入ってくるものだから、男性を転入生だと勘違いしてしまった。

クリスティアーネは父親のあとに川神学園に登校してきた。白い馬にまたがり、白馬の王子様よろしく華麗に参上してきたのだ。奇天烈ゆえにインパクトのある登場だったので、その光景がびっしりと目に焼き付いていた。

クリステイアーネは次々と自己紹介していった。ドイツのリューベックには日本人の友人がいたらしく、その友人と接していくうちに日本語を覚えたという。だから、外国人にしては日本語が流暢だったのだ。また、日本のことが好きで、現代の日本にはない武士道精神がお気に入りの方だった。それを堪能できるドラマ——時代劇をよく視聴しているらしい。小さいころからフェンシングを嗜んでいるとも言っていた。彼女のプロポーションの良さは、その賜物だろう。「彼はいるのか？」とクラスメートから質問をされたのだけれど、クリステイアーネはいないと答えた。

質問された際、「そんなものいないに決まっているだろうが！」と男性が怒号をあげた。浮ついた教室を一瞬で静かにさせるほどの迫力があつた。もし、クリステイアーネにちょっかいを出す輩がいた場合は、軍を率いてその輩を殲滅するという。男性の服装を見て薄々感じていたけれど、やはり男性は軍人だったようだ。しかも、軍隊を率いることができるほどの偉いさんらしい。これらからわかるとおり、男性はクリステイアーネのことを溺愛しているようだった。硝子を扱うかのように大切に育ててきたのだろう。

男性はクリステイアーネと少しの言葉を交えたあと、小島先生に促され、教室から出て行った。「クリス、なにかあれば戦闘機で駆けつけるからな」と言い残して。

「梅先生、提案！」

後方から床を擦る椅子の音と川神の声が聞こえた。なんだろうと思つて振り返つてみると、川神が天井に手を伸ばし立っていた。僕を含め、皆が川神に視線を送っている。

「なんだ、川神？」

「転入生を歓迎してあげたいと思いますーす」

川神は言った。

またも教室内が騒がしくなる。歓迎の意味を感じ取ったからだ。

僕は川神に呆れた。転入初日に行わず、クリスティアーネが学園の生活に慣れてから行えばいいと思ったからだ。しかしそれは、川神らしかった。

「ふふつ。川神、血気盛んだな。だが、それは面白い」

小島先生もノリノリだった。

そんなので教師が務まるのか甚だ疑問だけれど、ここは川神学園。生徒教師問わず変わり者が集まる学園なのだから、仕方がないことだった。

「クリス。そのポニーテールがお前の腕前を見たいそうだ」

小島先生は言う。クリスとはクリスティアーネの略称で、浸透しつつあるようだった。

クリスティアーネはハツとした表情をさせ、川神を見た。彼女も歓迎の意味がわかったのだろう。

歓迎。

ようするに決闘である。クリスティアーネが武術の一つであるフ

エンシングを嗜んでいるというから、川神はクリスティーアーネと戦えることが可能だと確信し、それを叶えるために歓迎という名の決闘を提案したのだ。

川神学園には他の学校にはないだろうシステムがある。それが決闘だ。その種類は様々で、運動力を競うものや記憶力を競うもの、精神力を競うものがあつた。川神学園に通う生徒全員にワッペンを手渡されており、決闘を申し込んだ一方がそのワッペンを床やら地面やらに置き、申し込まれた一方がその上に重ねることで決闘が成立するのだ。当然、申し込まれた一方が重ねなかつたら決闘は不成立となる。

今回の決闘内容は、互いが持つ武術の熟練度の競い合い――

「――なるほど」

クリスティーアーネは自分の顎に手を置き、納得する。そして、微笑かに笑った。どうやら彼女も決闘に乗り気なようだ。

「クリス！ 戦闘で勝負よ！」

川神は言つて、机の上にワッペンを置いた。

「わかった。受けて立つ！」

クリスティーアーネもワッペンを取り出し、その上に重ねた。

これによつて、決闘が成立した。

騒がしい教室内がさらに騒がしくなる。決闘を見れるということ

で、皆興奮しているのだ。

僕もそうだ。いつも先輩と決闘を申し込んでばかりではかの人
決闘は見たことが少なく、だからこそ決闘を拝めることにワクワク
していた。

川神とクリスティーネの二人は小島先生に許可をもらい、教室
に飾られている武具を取った。川神は薙刀を。クリスティーネは
レイピアを。それは、二人が得意とする得物だった。

飾られている武具はレプリカであり、切れはしない。小島先生の
許可がなければ触れることもできないのだ。

二人は火花を散らして教室から離れて行った。決闘場所は外のグ
ラウンドなのだ。

「皆で見届けるぞ。グラウンドへ移動しろ」

小島先生に言われ、僕らも教室を出てグラウンドに向かった。

グラウンドに出ると、大勢の生徒がいた。密度濃く犇めいており、
まるでアリの大群のようだった。川神とクリスティーネの決闘は
校内放送で全校生徒に伝えられた。見物をしたい希望者にはグラン
ドに集まるよう呼びかけられたのだ。決闘は川神学園の重大イベン
トの一つであり、人を引きつけるものだった。特に戦闘は、闘う者
だけでなく見ている者まで熱くさせた。

他のクラスの生徒や学年の違う生徒がいた。決闘ということ盛
り上がっているのか、商売している生徒もいた。完全にお祭り騒ぎ
だった。

（あの中にストラップの彼女がいるかもしれない）

そう思っただけで周り全体を眺めてみたけれど、人が多すぎて誰が誰だか分らなかった。探し出すことができなかった。

「よっ」

背後から声がしたと思ったら、肩を抱き上げられた。女性特有の甘い香りと柔らかい感触がした。

ぬっ、と横から顔が現れる。艶やかな長い髪に引き締まった顔。そして、猫のようにつかみどころのない目。僕の先輩であり、僕が武術で負けたいと現在進行形で思っている相手でもある川神百代だった。

「姉さん」

そのさらに横から男子の声が聞こえてきた。直江だった。彼も先輩の反対の腕で肩を抱かれており、先輩に顔を向けていた。驚いている表情をしていた。いきなり間近に整った顔が間近に来たことに驚いているのだろう。

直江は先輩を姉さんと呼んでいる。二人は姉弟分であり幼馴染でもある。長く付き合っていたからこそそのような親しく呼べるのだろう。

直江も横目で僕をのぞいてきた。視線が合う。

僕は先ほどの礼をかねて軽く頭を下げた。そして、前を向いた。

グランドの中央には、今回注目されているポニーテールとドイツ人が立っており、その間には、頭ははげ、立派な髭をたずさえた老人がいた。老人は川神学園の長であり、僕と直江の肩をつかんでいる先輩と今から闘おうとしている川神の祖父だった。名は川神鉄心という。鉄心学長は学園の責任者として決闘の立ち会うのだろう。

僕の耳に先輩の声が入ってくる。クリスティーネを見た先輩は、いたく彼女のことを気に入ったようで、「あの金髪は綺麗なもんだよな。なでなでしたい」と言っていた。かなりはしゃいだ様子だった。

先輩は女癖が悪い。女なのに悪い。美少女を発見したら、間髪入れずに一直線にそこに向かい、甘い言葉を美少女にささやく。そして、虜にする。それが先輩の美少女に対する常套手段であり、僕もよくその光景を目にしていた。

先輩が言うには同性愛者ではないという。ただ、先輩に近づく男がいなく、関心を持てる男もいないというものだから仕方がなく女に手を出すのだそうだ。先輩と関わり始めてから数か月が経ったとある日に訊き出したことだった。その時点で僕は先輩に心開いていたので、簡単に訊くことができた。

僕は少なからず納得した。先輩は学園一の美女として有名ではあるけれど、武道家としても有名で、その強さは世界一とも言われている。武術の達人である先輩の祖父の鉄心学長よりも強いらしい。そんな先輩と関わりを持つと何かされるかわからないから近づきたくないのだろう。

僕がその実証である。関わったばかりに複数の怪我を負わされた。

つい最近負わされ怪我はまだ治っていない。

（では、一体誰が先輩に関心されるのだろうか）

僕はふと考えた。しかし、すぐに考えるのをやめた。このまま美少女を追いかけ続けるのか、それとも新たに男に関心を持つのか、それを決めるのは先輩しかできないことであり、僕が考えたってどうしようもないことだったからだ。

「これより川神学園伝統、決闘の儀を行う！」

鉄心学長は声を大にして宣言した。グラウンド中がざわつく。とうとう、決闘が始まるらしい。

「二人とも、前へ出て名乗りをあげるがいい」

鉄心学長にそう言われると川神とクリスティアーネは一歩踏み出し、

「二年F組、川神一子！」

「今日より二年F組！ クリスティアーネ・フリードリヒ！」

と、グラウンド中に響き渡るほどの声を出した。気合十分のようだ。

頑張れ、頑張れ、と応援する声が観衆から飛び交う。

僕も声を出さずに応援する。もちろん、川神を。クリスティアーネには悪いけれど僕は、付き合いが長く仲がいいほうを優先する性

質なのだ。

「ワシが立会いのもと、決闘を許可する——」

鉄心学長は決闘での守るべき規則を川神とクリスティーアーネに注意した。二人は当然とばかりに、早々と承知の言葉を放った。

「では——」

鉄心学長のその声に反応した二人は、瞬時に闘える態勢に入った。一気にピリピリとした空気になる。

「いざ尋常に……はじめいっ！」

開始が告げられたのと同時に、川神が薙刀を構えながらクリスティーアーネに襲いかかった。

僕は無意識に拳をつくり、クラスメートの戦闘を見守った。

僕の期待を裏切り、川神はクリスティーネに敗北した。先攻していたはずの川神は一瞬の隙を、油断をクリスティーネに突かれて負けてしまったのだ。決闘はなかなか見物であつたけれど、残念な結果だつた。しかし、先輩の戦闘スタイルばかり見ていた僕にとつては、ほかの人の個性ある戦闘スタイルを見て新鮮だつたし、これからの先輩との決闘の参考になるかもしれないから得したと言えた。

決闘が終わつてからの川神とクリスティーネは、仲良さそうだった。はじめは言い争いをしていたようだったけれど、その中で互いをあだ名で呼ぶようになっていった。川神はクリスティーネをクリと呼び、クリスティーネは川神を犬と呼んでいた。二人は存外、相性がいいのかもしれない。

そのあとは味気なかつた。決闘で高まつた狂喜的な熱はすっかり冷め、生徒は元いた教室に戻つていった。誰もいなくなつたグラウンドは再び静けさが漂い、ただの広場となつた。そして、教室ではいつもと変わらない授業を受けることとなつた。

しかし昼休みは違つた。二年F組の教室に席が一つ増えたこともそうだけれど、そこに多くのクラスメートが集つたのだつた。いつもは一つの席に集まる人数なんて二三人ほどである。目当ては当然、転入生であるクリスティーネ・フリードリヒ。転入生というのは珍しく、滅多に来るものではない。ゆえに物珍しく、どんな存在なのか好奇心で話しかけてくたやまないのだ。それに顔立ちが整っている女子ときた。少しでも親しくなりたいと思つているのだろう。

でも僕はそうしなかった。自分の席に座り、クリステイアーネが中心となっている空間をうかがっていることしかしなかった。クリステイアーネはどんな人間なのか知ってみたかったけれど、僕は人見知りであるので近づくことができなかったのである。

終始クリステイアーネのまわりに人がおり、クリステイアーネも嫌な顔せず応えていた。そしてまた、午後の授業が行われるのだった。

放課後となり、僕はすぐに帰ろうとした。学園にいてもすることがないし、家に帰って軽く鍛錬をしようと考えていたからだだった。しかし、教室を出ようとしたところに先輩が訪れ、そう思ったら首根っこをつかまれていたところに連れまわされることになった。今は川神市内の商店街にいる。商店街というだけあっていろんな店があり、そこらにばつばつと客らしき人がいた。

「先輩、今日は一体どういう風の吹き回しなんですか」

僕は少し前を歩いてる先輩に声をかけた。

僕が先輩と決闘を申し込むようになってからある程度期間が経ったころ、先輩は僕をいろんなところに連れまわすようになった。それはいつも突然であり、僕を困らせることもしばしばであった。しかし、いつのまにか慣れてしまっていた。

「ん？ 単なる気まぐれだが」

相変わらずの理由だった。先輩と一緒に歩けることは僕にとって自惚れるほど嬉々たるものだったけれど、もう少し他人のことを考えてほしいとも思えた。

先輩と会話を交えながら、歩を進めていく。先輩はその途中にあった自動販売機で桃の缶ジュースを買い、歩きながらぐびぐび飲んだ。飲み干したのか、中身がないであろう缶を近くに置かれていた空き缶用のゴミ箱にめがけて放り投げた。弧を描きながらゆっくりと宙を飛んでいき、果てにはゴミ箱の中に入っていた。

先輩はさも嬉しそうに、ガッツポーズをとった。そして僕のほうを見て、どうだと言わんばかりににやりと笑った。自慢げだった。

「——でだ、メガネ。次はいつ闘う？」

何げないことを話しあっていると先輩がふと、訊ねてきた。

先輩は僕のことをメガネと呼んでいる。僕が眼鏡をかけているおり、僕の特徴がそれしかないことに起因していた。

「……今のところは、いつ闘うかは決めていないです」

僕がそう応えると、

「えー。なんだよー、早く決めるよー。私の拳がメガネを殴りたい衝動に駆られているんだよー」

と、駄々をこねる幼児のように先輩は不満を漏らした。先輩の手を見ると、たしかにそのような衝動に駆られているようで、震えていた。

（僕は先輩のサンドバックじゃねーよ）

言葉にしないで先輩に突っ込みつつ僕は、

「怪我が治るまで待っててください」

と、言った。

先日先輩に負わされた怪我は順調に治癒されていたっているけれど、まだ身体のふしびしは痛く、完治していなかった。僕も早く先輩と闘いたいのだけれど、治っていないままの身体に無理をさせてはいけないと思ったのでそう言ったのだった。

先輩は頬を膨らませてぶーぶー文句を口にした。それでも、僕の事情を理解してくれたようだった。

一つの丁字路に差しかったときには、陽が沈みつつあってあたりが薄暗くなっていた。前方と後方とに立っていた街灯には光が灯っており、まだ寒いと感ぜられる風が吹き、僕らの肌を撫でていった。

「だいぶ暗くなってきたな」先輩は足をとめ、空を見上げてつぶやいた。「そろそろ仲間のところに行くか。……そうだ、メガネ。いつまでも拒否っていないで、お前も来いよ」

僕はその誘いに対して、首を横に振った。

先輩に初めて決闘を申し込んだ日から十数日後。折れた鼻の調子が悪くなり、久しぶりに学園に登校した日。風間ファミリーメンバーを引きつれたそのリーダーに、僕は声をかけられた。怪我の心配ともう一つ目的があつたのことだった。それは、僕に風間ファミリーの仲間になってほしいという勧誘だった。リーダーは先輩に闘い

を挑んだ僕のことを面白いやつだと関心、そんなわけわからない理由で誘ってきたのだそうだ。

しかし、僕は誘いを断った。

嫌だったわけではない。むしろ、誘ってくれたことに感激していた。しかし、人見知りの僕にとっては風間ファミリーという異世界に飛び込んでいくことに迷いがあり、恐れていた。メンバーたちの人格を考えればそれほど恐れることはないのだろうけれど、どうしても躊躇してしまうのだった。それに一名、僕がメンバー入りに反対していた者がいたのだ。直接口でそう言ったわけではなく、視線で訴えかけていた。それはあまりに気持ちが悪くもっていて、僕は尻込みしてしまい断ったのである。

それでもリーダーはしつこく勧誘してきた。しまいには先輩や川神も誘ってくるようになった。しかし、かのメンバーのことを思うとどうしても断ってしまうのだった。

「……そうか。では、ここで別れることになるが、もし気が変わったら言えよ。大いに歓迎してやるからな。歓迎とはいっても決闘じゃないぞー」

じゃあな、と先輩は挨拶をして角を右に折りにいき、すたすたと進んでいった。先輩の後ろ姿を消えていくまで眺めた僕は、その姿が見えなくなると角を左に折ってそのまま家に帰ることにした。その道中、僕は先輩と闘う日程を考えていた。

5 (後書き)

六日ぶりの投稿です。

あまり書くことがなかったので、今回は短めでした。

あと、前回の話を少し修正しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8118t/>

真剣で私に恋しなさい！！～名もなき武道家の物語～

2011年10月23日23時00分発行